
砲丸少女と鍊鉄の英雄

きんぎょ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砲丸少女と鍊鉄の英雄

【Zマーク】

Z0080

【作者名】

きんぎょ

【あらすじ】

f a t e／となののはの無印クロスで、再構築モノです。なのは無印の設定をかなりいじくっています。それでも良ければ、一読していただけ幸いです。

第一話

なのはは、幼いながらに整った顔を悲しげに歪ませ、髪が首筋で跳ねるのを気にせずに走っていた。その額には汗が薄くにじみ、前髪が張り付いている。

走ることで負荷をかけてしまつのが心苦しいが、血相を変えてまで頼まれたのだ。ならば、少しでも早く走つてこの問題を解決するのが正解だろう。

それでも口を開いてしまうのは、この少女の優しさだった。

「ごめんね、フェレットさん。揺れ、辛くない？」

「ううん。僕こそごめん。巻き込んでしまって、それに」

「いいのいいのー。私は気にしてないから。それじゃペース上げるね！」

そういうてなのはは、地面を蹴る足に力を込める。いくら強大な魔力があろうとも、いくら精神が早熟していたとしても、肉体のほうは小学三年生のそれ。

空を切る手が、前へと進む足が、だんだんと力を失つていくのはしようがないことだつた。しかし、それでもなのはは前へ前へと足を出し続けた。

(シロウ、さん……！)

ただ、脳内に、その人を浮かべながら。

「ごめんね、フェレットさん。揺れ、辛くない？」
く。
「ホットミルクだ、落ち着くだろ？」

テーブルの上には、優しく置かれた喋るフェレット。そして、テーブルの横に、フェレットが会いたかった人物 ハミヤシロウが

居た。

シロウは、テーブルに着くと自身の前にマグを置いた。その動作を、なほはコップから立ち込める薄い湯気越しに見詰めていた。

時刻は、それこそ明かりが無いと、手前すら確認出来ない程夜が街を包み込んでいる。

灰を被つたような真白の髪を持つ青年は、チャイムの音に呼ばれて玄関先へと出た。付け加えると彼は調べ物をしていた最中であること、そして人が近付いて来たことすらも察することが出来ない程に弱体化した自分に、おくびにも出さないが少々不機嫌だつた。

そこにいたのははたして、高町なのはだつた。息は切れ切れでとても荒く、全力疾走してきたと推測出来るのを裏付けるように赤い頬。そしてその端正な顔には汗が浮かんでいた。

手には怪我をしたフェレット。

それは、魔法関連の知り合いであるユーノ・スクライアだつた。しかも、一般人であり、友達の娘である高町なのはが彼を連れて來たのだ。それは感情をあまり表に出さないシロウが、絶句をするくらい奇異な出来事であつた。

シロウが、詳しく話を聞かないと思わせるには十分すぎるくらい重大な出来事だつた。

「それで、どうしたのだ」

「どうしたじやないですよ！ シロウさんは今まで何してたんですか。あれから凄く心配したんですよ。生きてたなら、せめて一言でいいから連絡が欲しかつたです！」

ユーノは、シロウへとその怒氣をぶつけていた。

なのはは、フュレットの姿だからか、怒りよりも可愛さを先に感じる。

しかし、これでは話が進まない。自身が体験した不思議な出来事に、どうやらシロウも関係しているらしいし、その説明も、また、聞きたいところである。

そう考え、なのはは口を開いた。

「フュレットさん、少し落ち着いて欲しいな。

私は、学校から帰つてゐる途中に何かに呼ばれたような気がして、行ってみたら

「ユーノが居た、という訳か。……久し振りだな、ユーノ。それについては申し訳ない。後でゆっくり説明させてもらおう」
いつも浮かべている不遜な笑みを消し、本当にすまなそうな表情を浮かべるシロウを見ながら、なのはの脳内を疑問が埋め尽くしていた。

「……この件はジュエルシード絡み、か？」

「そうです、シロウさん。彼女も……なのはさんも捲き込んでしまいました」

そうして、ユーノは話を始めた。

一人の少女がユーノの念話を受け取つたことで始まる、出会いの話を。

話を聞き終わつたシロウは、ため息を吐いた。目を閉じていて、何を考えているかは分からない。

話事態は至極単純なモノだ。なのはが、ユーノの念話を受け取り、ユーノに会いに行くとジュエルシードが暴走していた。そこで、レジングハートを使用してジュエルシードを封印した。ユーノの怪我に関して、「シロウさんなら……」となのはが溢した言葉に、ユーノが大層驚いてシロウに会いたいと言つてきたのだ。

そして、今に至る。眉間にシワがよりはじめたシロウに、なのは何か不味いことをしてしまったのかと不安に思う。

シロウは、どんな状況であれ魔法に関わるのをよしとしない。魔法とは、即ち異端である。一般に生きていたら関わらないものなのだから。

ユーノの世界のようにおおっぴらに魔法の存在が広まり、認知されているならば話は別だが、今の地球はそうではない。出来るならば今からでも魔法に関するの関わりを断つて欲しかった。

だが。

「ところでなのは。君は時間は大丈夫なのか？」

「いやっ！ 忘れてた！ どうしよう……」

なのはは、頭を抱えてうずくまる。もし、こんな遅くに出歩いたのがバレたら、家族に何て怒られるか分かつものではない。

「送つていこう。……詳しい話はまた明日で良いか？」

良いも何も、これ以上話し込んだら刻々と状況は悪くなっていく。怒られるにしても、軽い方が良い。

シロウの言葉になのはは頷くと、立ち上がった。

さすがに夜はすこし寒い。

体全体を底冷えさせる夜気に、今までしていた思考を遮られる。

ユーノは、フェレットの可愛らしい姿に相応しくないため息を吐いた。

……動物の体は毛が生えてはいるが、人間の服のそれと大差ない。寒いものは寒いのだ。

「あー、明日の宿題忘れてた！」

「なのはは頭がいいからな。これからやればすぐ終わるんじゃないかな？」

一人の会話に参加せず今まで起じたことを整理してたコーコーだが。くつくつと喉の奥で笑い声をあげ、とても碎けた口調で喋るシロウを見て声を出して驚きそうになつた。

コーコーはHIMAYASHIROU アーチャーといつ青年を、冷淡で、他人と仲良くするのを良しとしない、ビニカ醒めた人だと思つていたのだ。

しかし、なのはと喋るシロウを見てその考えを改める。

と、シロウがコーコーに話かけた。

「コーコー。君は今晚どうするのだ」

「あ、シロウさんつて明日もあの家に居ますよね。でしたら、僕は今晚なのはと一緒に居たいです。

詳しい話は、明日の田中にでも聞きに行きます」

少し考え、コーコーはこう答えた。

「それは好都合だ。コーコー、なのはをつまくフオローしてやつてくれ」

え？ とコーコーが疑問を返す暇も無かつた。

一瞬で、コーコーの見慣れた顔 アーチャーの冷たいそれになつた。

そして、なのはに言つた。

「なのは。私は君が魔法に関わるのは反対だ。魔法は異端だ。関わるだけで君だけじゃなく、家族に被害が加わる可能性だつてある。

……この件は私の監督不届きだ。

私とコーコーとでちゃんとケリをつけることを約束しよう。だから、君は関わってはいけない」

……この発言自体は、コーコーのイメージするアーチャーといつ青年と反していなかつた。

ただ、小声でどこか囁くように言つたそれにすこし疑問を感じた。

アーチャーに接してたから分かる、ささやかな違和感。

しかし、それを追及しなかつた。ショックを受けた表情を浮かべるなほはを慰めるのに意識を割いてしまつたからだ。

そして、それを後で後悔することになる。

「なほは、シロウさんも言つた通り、後は僕たちでやるよ」

所変わつて、今はなほの部屋だ。

あの後高町家につくと、シロウは家に寄つていきませんかといつ
恭也　なほのは兄だ　の言葉を断り、そそくさと帰宅してしま
つた。

その際、シロウがなほのが外出したことについてのおどがめを無
くすために「まかした」「まかしたのだが、それがユーノにとつて
大変遺憾だったことを付け加える。

なほはから連絡を受けたシロウがフェレットの様子を見に病院へ
行つたのだが、そのフェレットが脱走したのだ。そして、それを聞
いたなほはが、家族に伝えることなく衝動的に飛び出した、となつ
ている。

確かに筋は通つてゐるが、納得いかないとユーノは軽く不貞腐れ
ていた。

(僕、脱走なんかしないもん!)

と、ユーノは頭を軽く降る。思考が逸れてしまつた。

そして、なほのはの顔を見つめた。

彼女は帰宅してから教材を広げてゐた。しかし集中出来ずに眉を
潜めたり、むーと唸つたりしてゐる。

その、宿題に集中できないでいる姿を見ると思つてしまつのだ。
心優しい少女を、これ以上厄介に巻き込またくない。

……虫の良い話だ。こちらから一方的に巻き込んだのだから。
「うん。ずっと考えてたんだけどね。……なんで、シロウさんがあ

んなこと言つたのかなって」

だが、なのははどこかずれた返答をした。

先ほどもユーノは思ったのだが、シロウがなのはが魔法に関わらないように言つるのはそこまでイメージと反していいない。

多人数では効率が悪いなどと真顔で言い、一人でジュエルシードを集めを行いそうな感じだ。

事実、その考えを裏付けるように彼は馴れ合いを好みなかつた。ユーノが彼のシロウとこう名を聞くまで、そこそこ時間がかかつたののだ。

そしてユーノは、シロウが手伝いをしてくれたジュエルシード発掘作業を思い出す。思い出すといつまで時間は経つてないが、密度の濃い時間のお陰でそう感じていた。

その一日を坦つなのはを見、そして誤解を解こうとした。

しかし、それより早くなのはが言葉を続けた。

「あ、ユーノくん。でもね、私はぜつたいに手をひかないよ」

「……え？」

何が起つてゐのかはまだ良く分からぬけど。

なのははそう咳くと、ユーノを見た。

「誰かが怪我をするのは嫌。それを助ける力があるなら、見過せない」

そこまで一息でなのはは喋ると、田を開じて息を吸つた。

「にやはは。だから、そういうことは言わないで欲しいな」

「そつか、うん、」めん。これから、改めて宜しくお願ひします」

シロウさんにちゃんと説明しようと。そして、一緒にジュエルシードを集めたい。

ユーノが、そう思つた瞬間だつた。

唐突に、悪寒のような感覚が全身を走る。慣れ親しんだ感覚。

しかし、今は悪い方向にしか考えが行かない。

「なのはっ、結界が張られた。 魔法が使われた！」

外灯の光が、夜の暗さになれた目に鋭く刺さり鈍痛が走る。

他人よりも視力が格段に良いのも考え方だ、とシロウは考えた。

……今日は殊更冷える。春も半ば、これから夏に差し掛かろうと
いつの日、この寒さは冬に戻つたみたいだ。いくら英靈といつても、
受肉した今人の身で有るにはかわりない。寒いものは寒い。

本当に、ただの人だ。魔術も使えない——

羽織つていたジャケットの前を閉める。そして、暗い気分がそのまま息となつて出た。

「ク、お互大変だな使い魔。この寒い日に
ため息が漏れた口を閉じることなく、そこからは新たに言葉が発
せられた。

……不信に思つた切つ掛けは、なのはとゴーーを家へと送つてい
る最中のことだつた。じゃり、じゃりといつ、小さな砂利を踏みし
める音が背後から響いていた。

尾行だ。

だが、シロウにとつてはあまりにお粗末なそれだつた。
足音を立てているようじや三流以下だ。

前にいた世界は語るに及ばず、この世界に来ても散々管理局らに
使い魔や遠見などによつて探され続けたのだ。

いくら魔術が使えなくても、気が付かない筈が無い。

「 気が、ついていたのかい。

はん、相変わらず破格だよ、お前は。魔力を封じられてそれなん
だからね。

それで、今のアンタは幼女の保護者かい？」

その言葉に、人知れずシロウは安堵の息を漏らす。

もし、彼女がなのはのジュエルシード封印の瞬間を見ていたのな
らば、後ろにいる女とその主は間違いなくなのはを襲い、戦闘に發
展していただろうと考えたのだ。

だから、先程なのはに針を刺したのだ。

今後ろにいる彼女は甘い。

戦う意識が無いと分かれば、見知らぬ女子供と命懸けの戦いにまで発展はならないだろうと思つたのだ。

それが取り越し苦労であることが分かり、それ故の安堵の息だ。

しかし、魔法に関係しているのがバレてしまったのは確実だ。保護者、というのはそれを例えたのだろう。

それでも大丈夫だとシロウは思う。彼女たちの第一目的は、あくまでも宝石集めだ。なのはから手出しをしなければ戦闘に発展はない筈だ。

……しかしまるでシロウを待つように高町家の前まで尾行をし、声をかけられて素直に姿を表したのは、つまりそういうことなのだろづ。

くつ、と喉を一回震わせると、シロウは後ろを向いた。

「たわけたことを言う。知つているのだろう？~

私は……”正義の味方”だ」

第一話（後書き）

読んで下せつあつがとひりやれこます。

三本田の連載とか、執筆速度が鈍亀な俺にひとつや二つや自殺行為です　www
どうしようやつちました　www

マジで更新は遅いです。たまにふりつと訪れて頂ければありがたい
です。

第一話（前書き）

* 最初の内はシロウさん戦力外です。

第一話

そこに、アルフが居た。

金髪の娘の使い魔で、アルフと呼ばれている。今は人形だが戦闘時には巨大な肉食の獣の姿形になり、手に生えた爪から重くて鋭い強烈な攻撃を放つ。というのがシロウの知っている全てだ。

「……それは、私たちと敵対するってことでいいんだね」

ギロリ、と擬音がついてもおかしくない位、視線に怒りを乗せて睨むアルフ。そんな彼女に、シロウは苦笑を持つて答える。

「そうでもない。事情がわからないのに敵対する程馬鹿ではないさ」「なっ！あの時散々攻撃してくれたじゃないか！」

「……馬鹿か？いきなり襲われて、無抵抗なやつがどこにいるというのだ」

「そつそれはそうだけど……。もう、後にはひけないんだよつ！決意してここまで來たんだ。

正義の味方。アンタは、絶対に私たちの邪魔をする。悪いけど、今之内に 殺させてもらうよ！」

空気が変わる。揶揄でもなんでもなく、アルフが結界をつくり、文字通り変わったのだ。

戦闘の兆しを感じとり、シロウは口角をニヤリとつり上げる。そして、両手を肩まで上げると脇を締めた。戦闘体制だ。

「徒手空拳は苦手なのだがな。このさう文句を言つてもしようがないか」

アルフが魔力光を放ち、獣へとその姿を変える。

立派な鬣、鈍い光を反射する牙、人の姿を優に越える巨体、足なんかははち切れんばかりの筋肉を見てとれる。そして自然種にはあり得ない、獰猛さが現れると錯覚すらしてしまう毒々しい橙色。

その姿は、一撃で人を容易く葬り去る死神そのものだった。

目の端に過るのはあの記憶。座について消え去る筈の記憶が、

最愛の人によつて救われたそれ。

頭がチリチリと痛む。なにかに急かされるような感覚だ。

それは田の前に迫つた獣の爪か。今も田の中で鮮やかに蘇る、元居た世界で見た虹色に輝くその軌跡か。

否。それは打ち合いだった。

己自身の、理想と現実をぶつけ合つた戦い。

バックステップを踏む。

体が重い。強化も出来ないただの人の身は、こんなにも不便なんか。皮一枚で交わした爪が空気を裂き、体を撫でた。

戦いの最中に相応しくない、思い出し笑いが込み上がる。

（そうだ。私は、正義の味方なのだ　）

「チイ、かわすな！」

「無茶を言う。私に死ねと言つてるのか？」

「最初から、そう、言つてるだろうが！」

どこかふざけた会話をしながら、アルフは噛みついこうとする。

獣の強靭な肢体から生まれる攻撃は、とても強烈だ。一瞬でシロウに肉薄して、その体をミンチにしようとする。

しかし、シロウも黙つて殺られる筈も無い。体を右に傾け、その勢いを持つて攻撃を避けようとする。

が、交わしきれずに歯が足をかする。それと同時に、シロウが振るつた右手がアルフの頬に当たる。

痛み分けだ。

アルフの歯がかすつた足から血が流れ続ける分、シロウの方がダメージを受けているが。

「やっぱアンタは強い。だから、私は全力でアーチャーを……殺す

ッ！」

と言つと、アルフは人形に戻つた。

そして右手を虚空へとつき出す。その手の周りにバチリと電気が走る。それを見たシロウは、直感的につるくなものじやないと感じ、アルフに突つ込んで発動を止めようとした。

が。

「遅い！」

フォトンランサー・マルチショット。

シロウよりも早くアルフが放つたのは、この魔法だった。ナイフのような形に圧縮された雷が、数本発射される。アルフは肉弾戦を得意として、このての魔法は主であるフェイトに比べると格段に劣る。

だが、攪乱目的で放たれた魔法はこの上ない効果を發揮した。地面にぶつかっただ一本が、ぱちりと弾けとんだ。シロウは内心毒づきながら、フォトンランサーを避けようとする。

アルフには、この隙で十分だった。

「チエーンバインドッ！」

アルフが伸ばした手の回りに、魔方陣が浮かび上がる。そこから半透明の鎖が出て、たらたらを踏むシロウを捕まえようとする。

と、強烈な魔力が迸った。はたしてそれは、淡い桜色だった。結界の外から放たれた、砲丸魔法、は、容易く内部へと貫通した。非現実と現実が混ざり合い、パキン、と軽い音を経てながら結界は崩れ去る。

異質な空気は全て空中に溶け、街灯に照らされてどこか寒々しい、夜の空気が闊歩する路地へと戻った。

そこには、地面にへたれ込んだ女の子が一人と、小さなフェレットがいた。

「ふ、ふええ……」

小さな魔法使いは、自分が起こしたことがどんなに凄いのかを分からず、過度な魔力の酷使に目を回していた。

「強く願うんだ！ レイジングハートを握って、心の底から、強く

！」

「うううん」

なのはは少しどもりながら、小さな両手で杖を確りと握っていた。場所は家の前だ。

ユーノが魔法の使用を感じて、なのはの部屋の窓から一人は飛び出した。

……最初から近いうちに襲われると分かっていた。あんなにもしつこく、ジュエルシードを求めて襲ってきた少女たちが異世界に遭難したくらいでは諦めないと考えていたのだ。

その考えは合っていた。襲われたのは偶々今日で、ユーノではなくシロウだつただけの話。

そして、この事件の背後にはかの大魔女プレシア・テスタロッサが関わっている。

襲われても彼の実力なら大丈夫だとと思うが、シロウという大きな障害に対して大魔女ならなんらかの手を打つてくるだろう。力を封じたり、とか。

（まあ、さすがにそれはないだろうけど）あまりにも突拍子もない発想に、ユーノは苦笑してその考えを否定する。

しかし、今結界を貼られてシロウが出てこないのは事実だ。何かが起こつてるのは確実。

心配しても、し過ぎるなんてことはないのだ。

ユーノは小動物にしては豊かな表情で不安げな色を瞳に浮かべると、横にいるツインテールの少女の横顔を見つめる。

膨大な魔力を保持し、初めて魔法に触れたのにジュエルシードを封印するという偉業を達成した。

額に汗を滲ませながら杖を握る姿に、ユーノは正直に言つと期待していたのだ。

彼女なら、なのはなら大丈夫だ、と。

魔法の力は思いの力。真摯に願えば願うほど力は上がる。

ならば、初対面であるユーノ自身を助けるのに躊躇が無かつた心

優しい少女は、シロウを助けることが出来るのではないか。
そう、結界をぶち抜くほどの魔力を放てるのではないか。

(頑張れ、なのは!)

応援しかできない自分に不甲斐なさを抱きつつ、なのはを見つめる。

「えつとレイジングハートさん。

お願い、シロウさんを助けるの、手伝ってっ!」

<A11 Right, my Master. Shooting
Mode>

え、ほ、本当に?

予想にしてなかつた程沢山の魔力がなのはから溢れでて、ユーノ
は驚きを隠しきれず口から言葉が漏れる。

「大丈夫だよね。 レイジングハート、いくよっ!」

と言うと、なのはは杖を振りかざした。

先端に膨大な魔力が集まる。小学生が集められるものじやけつし
て無い量。

ましてや、今日初めて魔法と出会つたなんて誰が信じられるだろ
うか。

そして、綺麗な桜色をした魔力は限界まで集められて解き放たれ
た。

ユーノは、なのはといつ少女の恐ろしいくらいの才能に今日一番
驚く。

ディバインバスター。

なのはが使つた魔法だ。

「チイ、新手かッ！」

アルフは、その鋭い犬歯を見せながら憎々しげに呻く。

「なのはにユーノか。……助かつた」

対してシロウは、表情をあまり変えずに言つた。
しかし、その足からは血が流れている。

「シ、シロウさん！ 大丈夫なの？」

なのはは小さく悲鳴を漏らすと、血相を変えて、ぱたぱたと足音を立てながらシロウへと走り寄る。

（シロウさんが、怪我を……？）

彼の、管理局から田をつけられるほどの実力は偽りではない。
ユーノは疑問に思う。確かにアルフは強い。強いため、シロウにそう易々と怪我を負わせれるだろうか。

ユーノは、アルフをじいと見つめた。

アルフも謎のフェレットを不思議に思つたのかユーノのことを見て、二人の視線が合つた。

「……ん？ このちつこいのはもしかしてユーノかい？ ああ、あの魔女の魔法を食らつたからかい？」

ユーノはその瞬間を思い出して苦渋を飲んだ顔をする。

二人の襲撃者と戦闘を繰り返しながらも、ジュエルシード願いの良し悪しにかかわらず、真摯な願いに触れるとそれを実現しようとする宝石だ を発掘し、管理局まで郵送しようとした時のこ

とだ。

空から、雷が降ってきた。

カラリと、湿気のしの文字すらない空から強大な魔力を内包したそれは、どうやらフレシアによるものだつたらしい。

……ま、最初からそうだろ？と検討はついていたのだが。そして、その方にどこか逃げようとしたら「！」、鳴海市へと飛ばされたのだ。

そこにシロウがいたのは不幸中の幸いといつべきか。

「本音を言つとか、それについては同情するよ」

アタシは絶対嫌だ。そう言いながら、両腕で体を抱くアルフ。その動作に、どことなく悔穢を感じてユーノは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「う、うるさいやい！　お前なんかアーチャーさんにしてんぱんにやられればいいんだ！」

魔力体力ともに疲弊しきつた今、ユーノ自身が倒してやると言いつ切れないのが、かなり悔しくて情けない。

「ほおう、知らないのかい？」

「今のアーチャーは、弱い」

鍊鉄の英雄と砲丸少女、第三話始まりますっ！

「ユーノ。……それは、本当だ」

ユーノが何か言つよりも早く、シロウが口を開いた。その声色は隠しきれない苦渋が溢れでており、事実を雄弁に語ついていた。

何がなんだか分からない。

と、図つたわけでもないのになのはとユーノは同時に思った。なのはは、ほんの少し前に田常から非田常へと飛び込み、魔法という異常に関わった。

それだけではなく、親の友達であるシロウが魔法使いで、偶然知り合つたフレットのユーノと知り合いだつた。さりにせ、血が流れるような戦闘が行われて怪我を負つていたのだ。

でも実際は強くて、でもでも弱くなつてて？

(ニヤ、ニヤー…)

なのはの頭は、パンクしかかつっていた。

先ほど今までならば、そんなんのはのフォローにまわつていただろうユーノも混乱している。

(あーもー、なんなんだよこの状況ツ！ シロウさんはいきなり消えるし、フレシア・テスタークサに襲われるし、シロウさん弱くなつてるらじこいし！)

怒涛の“し”三連続だった。

「そここの女の子！ 邪魔するなら、ガブリといくよー。」

しかし、アルフは考える時間を許さない。

邪魔するなどなのはに凄んだあと、ふ、と腹から短く息を吐いた。そして、シロウとの距離をつめようとした。

「だ、だめなのっ！」

しかし、両手を広げたなのはが止めようとする。

その背中を、シロウはびっくりした表情で見ていた。

……裏切りには慣れていた。

助ける為に向けた背中。しかし、それに斬りかかられるなんてのは日常茶飯事で。

だから、こそ。

躊躇もなくシロウの前へと飛び出し、向けられた小さな女の子の背中を、どこか眩しそうにシロウは見た。

アルフは、そんな彼らを一瞥すると何も言わずに走る。

前髪が顔に掛かり、その表情をつかがい知る事は出来ない。ただ、

口元は憎々し気に歪んでいた。

「戦いはダメっ！ 私は何が起つてるか分からぬけど。……あの、話し合ひつて出来ないの？」

「つむさい小娘だね！」 こちには時間が無いんだっ！

何がアルフの琴線に触れたかは分からないが。なのに叫ぶと、走る勢いを強くする。

間に合わない、とシロウは思う。

アルフのスピードは早く、今からなのはが回避をするのは厳しく思えたのだ。

なら。

シロウはその筋肉逞しい腕でなのはを抱くと、地を蹴って下がる。勿論アルフも追随し、爪を振るう。

しかしシロウの放った蹴りによつて、その手を止めなくてはいけなかつた

「ふ、ふえええ……」

瞬間の出来事に、なのはは田を回しながら息を吐いた。

そんな姿にシロウは眉尻を少し下げながら、口を開く。

「なのは。昔から思つていたが、君は無茶をし過ぎる。
……もつ少し自身を顧みてくれ。」

「あ、ありがとうシロウさん」

話ながら、シロウは抱えていたなのはを離す。当然、視線はアル
フから離さずに、動きがあつたら即座に対応出来るようにしている。
と。なのはは、そこから動かすに。

「 シロウさん、あのっ！」

口を開いた。

時間がない。

アルフは、この一心に突き動かされていた。

……アルフと主は、少し前に別の世界から転移魔法によつて鳴海
市へと訪れた。

その際時、アルフは主である少女が転移を行つ際に、わざと転移
魔法を手伝わなかつた。

それは疲れた主に変わつて鳴海市を見回り、そして アーチャ
ーを殺すためだつた。

ギリ、と奥歯が音をたてる。氣が付かないつちに奥歯を噛み締め
ていたらしく。

アーチャーという存在の厄介さは、そういったことに疎いアルフですら知っていた。

強大な力を持つていて、敵と定めたものは必ず殺す悪魔のような存在。

……ほんの少し前のこと。世間を賑わせていた次元犯罪集団であるウラドを壊滅させたのは彼らしい。管理局が追い詰めるより早く、だ。

管理局よりもたつた一人の人間が優つていたのだ。これは、明らかに異常な事で。プレシアが彼のことを 研究以外のことを調べいたのは記憶に新しい。

だから、‘それ’が彼女たちの前に現れた時は悪夢としか思えなかつた。

彼の力を封じじることに成功した時、魔女下されたアーチャーを殺せという命令はアルフにとつて不本意だが共感したのだ。

こいつは、絶対自分たちの邪魔をする。だったら、弱つてゐるうちにケリをつけなければ。そう、アーチャーが魔力を封じられただけで自分たちを諦めるとは思えなかつたのだ。

だが、その時殺さなかつたことに後悔はしていない。
フェイトに殺人を行つて欲しくはなかつた。

おかしな話だが、こうしてアーチャーと対峙していることにどうとか安堵している面も合つて。でも、だから今こうして強大な敵に対して一人で立ち向かわなければいけなくて。

プラスとマイナスに支配された、複雑な心境に内心で溜め息をはく。

「戦いはダメっ！ 私は何が起こつてゐるか分からぬけど。……あの、話し合ひつて出来ないの？」

「つむさい小娘だね！ こつちには時間が無いんだつ！」

吠える。

(ツラいよ、つたく……)

弱っているとはいえ、ただでさえ厄介な相手に見た目とは裏腹に

優秀な少女。

可愛らし外見に騙されることなれ。内包する巨大な魔力、それを駆使して結界を破壊する程度の制御力を持ち合わせているのだ。

正直、やつてらんねえ。

(ま、フェイトのが強いけどさー！)

とはいって、一人で戦うには少しばかり……かなり、厳しいものがあるだろう。

だけど負けられない。ここで、一人とも倒す。

決意したのだ。

先ほどの転移魔法の折、手伝わなかつた時、大切な主にこれ以上負担はかけさせまいと。

この二人は確実に邪魔になる。

だつたら、ここで刺し違えても一人を止める……！

少女を抱いて下がるアーチャーに食らいつくように攻撃を放とうとするが、それは彼の蹴りによつて止められてしまう。

はやる気持ちを抑えながら、別の手を打とうとする。しかし、それよりも早く少女が口を開いた。

「シロウさん、あのつ！

私も、お手伝いします。……魔法使えるし、足手まといにはなりません！」

「はっ？」

……珍しいものを見た。

何があつても冷静沈着なアーチャーが、目を見開き口を開けて驚いている。魔力を封じられた際にも顔色一つ変えなかつたのに（実際は、ポーカーフェイスを必死にしていたのだが、アルフは知らない）どうやら人間らしいところもあつたらしい。

と、内心で愚行していた自分を律する。アーチャーが呆けている今、チャンスなのだ。

魔法の一発や一発でもくれてやるひつと自身の内にあるそれを練り上げようと、した。

その瞬間だつた。

アルフにとつて、もっとも大切で だからこそ、今聞きたくなかつた声が響いた。

「 アルフッ！」

最初からわかつっていた。わかつっていたのだ。
プレシアに忠実な主のことだ。ほんの少し体を休めたら、ジュエルシードを捜索するために町へ出ることは。なのに、この状況。歪ませた顔に何を思ったのか、血相を変えて走つてくる主に申し訳なさから顔を反らす。

「……」「めんよ、フェイト

「ううん、大丈夫？ 怪我はあるの、アルフ」

フェイト・テスタークサがこの場に現れた。

第三話（後書き）

難産でした。

いやほんとマジで、己の文章力のなさに絶望しながらこの話打つてましたよ。

設定を詰め込みすぎた。orz

最初の内から設定小出しにするんだつた。てか、出だしを変えるべきだつたとうづづる。ry

今話、ひどくてごめんなさい。

今の俺じゃこれ以上かけねえっす

余力があるときに改訂します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0080j/>

砲丸少女と鍊鉄の英雄

2010年10月10日02時36分発行